

使われなくなった  
のこぎり屋根工場  
今後を語る座談会

第四回

報告書

のこぎり座

座談会内容

『磨き』

企画：(仮)ノコヤネ廃材活用研究会

日時、平成二十九年三月十九日

午前十時～正午

場所、平松毛織株式会社工場

一宮市籠屋四丁目十一番三号

#### 第四回のご座 『磨き』

日時 : 3月19日(日) 午前10時~12時

会場 : 平松毛織「のこぎり二」(一宮市籠屋4-11-3)

参加費 : 無料(持ち物:軍手、磨き道具(綿布、たわし等))

企画 : (仮称)ノコヤネ廃材活用研究会

第四回「のご座」は、ノコギリ屋根工場が使われていた、使い込まれた机や棚、木箱や糸巻きの木管、トタンなど、ノコギリ屋根工場の解体現場からいただいた埃まみれの古い品々を、参加者の皆さんと「磨き」作業をしながら再利用の途を考えました。



## ■そもそもの発端

繊維のまちの地域文化を残すためノコギリ屋根を保全活用したいという「のこ座」に集まった人の思いから始まっている。建物全部の保全活用は難しくても、部材や家具、道具や資材などパーツなら地域で再利用できる可能性が高いのではないかと、ノコギリ屋根のパーツを再利用することで繊維のまちの文化を残していけるかもしれない。

そこで、(仮称)ノコヤネ廃材活用研究会なる集まりを呼びかけて、信州諏訪で古材リサイクルを新しく始めた「ReBuilding Center JAPAN」を勉強したり、名古屋で「思いやり解体」を実践している解体業の(株)リバイブの平沼さんの話を聞いたり、勉強会から始めることにした。そんな折に、起小学校の隣にある「起染色」の工場が解体されている現場の前を偶然に通りにかかった。この街では特別なことではないのだけれど、そこに見え隠れする廃材が気になって仕方がない。頭で勉強ばかりするよりも小さな実践で経験することが大事だと思って、翌日の朝に解体現場に突撃訪問した。結局、2日間続けて通い、わずかな廃材、主に机や棚、道具箱など手で運べるものだけ、分けてもらってきた。解体現場の作業員が不思議がるなか、埃まみれの品々をとにかくもらってきてしまった。研究会の際に、とにかくみんなで埃まみれの品々を磨いてみようという話になり、平松毛織の平松さんの計らいで第四回のこ座「磨き」として開催が決まった。







## ■当日

好天に恵まれたなか20人弱の参加者が集まった。Facebookの案内をみて初めて来た人もいた。

はじめに、参加者に趣旨を説明した後で、磨く廃材をわけてもらった「起染色」の解体現場の写真を見てもらった。その後、それぞれに磨きたい品を選んで磨いてもらった。

染色工場の片隅で使っていた真っ黒な作業台を雑巾でこすると、木に染み込んだ当時の染料が滲み出てきて雑巾が紫色に染まった。糸巻きの芯にする大量の木管には、特注品なのだろうか様々な繊維会社の名前が焼印されていた。単純な手作りの本立てなのに、妙に分厚い板材をつかって頑丈につくられている。一方、高級そうでもない棚の脚が妙に装飾的につくられて、しかも手間をかけて丈夫にできている。マージャン専用の机があって点棒を入れる細かな仕切りの引き出しがあり、まるでジュエリーボックスのような造りになっている。そんな感じで、いま市場に出回っている商品には考えられないような材料や作り方が施されていた。また、参加した建築家に古材にあうワックスを持参してもらい、古びた状態を損なうことなく机を磨きあげたりした。



特に、作業台の引出しから出てきたアルミ製の大きなスプーンが印象的な品物だった。たぶん染料の調合などに使っていたのだろう。金属の板材から切り出して叩いて自作したような感じだ。妙に長い柄の反対側には耳かきのような匙もつくってある。小さな耳かき部分で微妙な色の調合をしたのかだろうか想像を掻き立てられる。

今回「磨き」に参加した方からは、楽しかった、面白かったという声を多く聞いた。自分もやってみて「磨く」という行為はモノと対話するような感覚がある。当時の仕事のこと、使っていた人のこと、当時の時代背景などを、いろいろ想像してしまう。そして、綺麗にするという行為がとてもクリエイティブに感じたのが印象的だった。積ったほこりや余分なものを取り除くこと、磨きだしていくことで、一見隠れていたモノの機能や素材の魅力を見つけ出し、見えるようにしていくことができる。



## ■これからのこと

今回磨いた品は「のこ座」で使う大きな机以外は使ってみたい人に無期限でお貸しすることにした。事実上、差し上げるのに近いのだけれど、どんな使い方をしているか報告をしてほしいのと、もし不要になった際には返却してほしいためだ。実際に、今回の参加者に聞いてみても、小さな木簡や茶道具などを持ち帰る人はいたが、ほとんどの品々は残ってしまった。個人の日常生活空間で使うには、あまりに重たい雰囲気なのだろうか。自分の家や事務所に持ち込んでも浮いてしまうのだろうか。

それぞれの品は、どんな使われ方をしていたのか、どんな物語が潜んでいるのだろうか。使っていた起染色さんはどんな会社だったのか。そうした廃材にまつわる物語を知りたくなる。できるなら関係者や使っていた従業員のお話も聞いてみたい。

「起染色」についてご存じの方は情報提供をお願いします。

まだ、次の展開は考え中である。できるなら、小さな一棟のノコギリ屋根工場の解体に携わってみたい。クジラを解体して隅々まで使い切るような感じで、一棟のノコギリ屋根の部材がどう再利用できるのか、関わったみたい。どなたか、情報提供ください。解体を決めて着手する前のノコギリ屋根工場を知りませんか。

(仮称) ノコヤネ廃材活用研究会に関心のある方も、藤森までご連絡お待ちしております。

今後の活動は、Bishu\_Textile\_Townのメーリングリストで流していきます。

メーリングリストへの登録は、<http://textiletown.net/> サイトより。

(仮称) ノコヤネ廃材活用研究会 藤森幹人 fuji@taiwa-k.jp







木管活用例 1 : 手織り器 (岩田真理子さん作)

木管活用例 2 : 縄跳び (青木俊克さん作)

